

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 23日現在

機関番号：16401  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21520261  
 研究課題名（和文） ホーソンと人種表象

研究課題名（英文）  
 Hawthorne and Race

研究代表者  
 藤吉 清次郎（FUJIYOSHI SEIJIRO）  
 高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授  
 研究者番号：80238625

## 研究成果の概要（和文）：

19世紀の奴隷制問題や人種問題がホーソン文学にいかなる影響を与えたかを検証した。その際、ホーソンの『緋文字』と、現代の黒人作家トニ・モリソンやインド系アメリカ人作家バハラティ・ムカジーの作品とを比較考察することによって、ホーソンがスレイブ・ナラティブを利用していること、またホーソンの『緋文字』が密かに人種的混淆の問題を取り扱っていることを明らかにし、ホーソンの物語が当時の人種問題に密接に関係し、言い換えるとこの作家の文学がいかん人種表象に依存しているかを指摘した。

## 研究成果の概要（英文）：

I have investigated how the slavery abolition movement in mid-nineteenth century America influences Nathaniel Hawthorne's literary world. In the research, first of all, I have made clear the limitations of *The Scarlet Letter* as a slave narrative by comparing it with Afro-American writer Toni Morrison's *Beloved*. Secondly, I have considered how Hawthorne's *The Scarlet Letter* influences Indian American writer Mukherjee's *The Holder of the World* in terms of hybridity or miscegenation. Thirdly, I have showed how Hawthorne's *The Blithedale Romance* reflects his opinion in regard to the anti-slavery movement in mid-nineteenth century America.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ホーソン、奴隷制廃止運動、人種表象、ムカジー、モリソン

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 19世紀のアメリカ人作家ナサニエル・ホーソンの人種意識についてはこれまで、あまり論じられることがなかった。

というのは、この作家は後輩作家ハーマン・メルヴィルとは異なり、当時アメリカ社会を揺るがしていた黒人奴隷制などに纏わる人種問題を作品の中で明確な形で

描いておらず、そのため彼がこの問題を意識的に避けていると考えられてきたからである。

(2) ホーソーン作品は近年当時の人種問題に関連づけられ、論じられてきている。例えば、ラリー・レノルズは時代的な文脈なかで奴隷制問題を考察し、ホーソーンの人種の問題への解明を試みている。また、サクヴァン・バーコヴィッチは『緋文字』の有する曖昧性を1850年に制定された逃亡奴隷法に対して抱いた当時の人々の割り切れない感情と関係づけて論じている。しかし、ホーソーン文学世界における人種問題は、十分に解明されているとは言い難いように思える。

(3) ホーソーンの人種意識の解明には、人種問題を重要な文学的モチーフとして描いている同時代作家であるハーマン・メルヴィルやストウ夫人の人種意識との比較考察が不可欠であるが、これまで十分な考察がなされていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究では十分に解明されてきていないホーソーンの人表象を考察することによってホーソーン文学がこれまで考えられてきた以上に当時の人種問題と深い関わりを持っていることを明らかにし、人種的要素がこの作家文学世界をより豊饒なものにしていることを考察することを目的とする。その過程において、多文化社会である現代アメリカ社会における『緋文字』の有する意味を検証したい。

## 3. 研究の方法

(1) ホーソーンが『緋文字』にスレイヴ・ナラティブを利用していると思われるので、国内外の図書館、資料館においてスレイヴ・ナラティブに関する資料を収集し、検証を加える。

(2) ホーソーンの人種意識、彼の作品における人種表象を明らかにするために、現代の黒人女流作家トニ・モリソンとインド系アメリカ人作家バハライ・ムカジーの作品を利用するので、ふたりの現代女流有色人作家に関する資料をできる限り収集し、検証を加える。

## 4. 研究成果

(1) トニ・モリソンの『ピラヴィド』とホーソーン『緋文字』を比較考察し、スレイヴ・ナラティブとしての『緋文字』の限界性を明らかにした。ホーソーンが『緋文字』を執筆する際、19世紀中葉アメリカで盛んに書かれていたスレイヴ・ナラティブを意識していたと想定し、このホ

ーソーン代表作をスレイヴ・ナラティブの観点から、考察した。ピューリタン社会においてヘスターの置かれた状況奴隷制下で苦しむ奴隷の母親の状況と酷似していることを指摘し、さらに現代黒人女流作家トニ・モリソンの代表作『ピラヴィド』と比較検証することによって、より具体的にはヘスターの苦悩とセスのそれを比較考察することによって、ホーソーンのスレイヴ・ナラティブが黒人奴隷の苦悩を十全に描き得ていないことを明らかにした。黒人はホーソーンにとっていかなる意味あったのか。モリソンは『白さと想像力』の中で、白人作家が自分たち白人を自己定義するためのシンボルとして黒人を利用しているに過ぎないことを鋭く指摘している。つまり黒人は文明人である白人の理性、近代性、秩序、血の純血などの特性を確立するために、非合法なセクシュアリティ、狂気、無秩序、野蛮、血の汚れなどの負の側面を担わされた「人種的他者」として機能しているというのである。このモリソンの指摘はホーソーンが描く「黒人」にも適応できるであろう。従って、ホーソーンが描くスレイヴ・ナラティブの限界が見えてくる。『ピラヴィド』のセスの苦悩と『緋文字』のヘスターのそれをスレイヴ・ナラティブという観点から比較考察してみれば、われわれはモリソンが人種差別に関してアメリカ社会に突きつける重いメッセージを受け止める一方で、白人作家ホーソーンのスレイヴ・ナラティブの限界、あるいは黒人表象の限界を認識せざるを得なくなるのである。

(2) ムカジーが『緋文字』を換骨奪胎して *The Holder of the World* を創作した要因を論究し、『緋文字』の持つ現代的意義を人種的・文化的混淆性の観点から考察した。この作品において、ムカジーは20世紀アメリカに生きるベイ・マスターズという若い女性に17世紀のアメリカにタイム・トラベルさせ、17世紀に生きたハンナ・イーストンの人生を追体験させることによって、アメリカが文化的も歴史的にもインドと関わっていることを描き出している。ムカジーはこの改変小説において『緋文字』のヘスターが十全には果たし得なかった、人種的・文化的・ジェンダー的な「越境」をハンナに遂行させ、そのことを肯定的にとらえている。この作家は文化的・人種的混淆性について、人種的・文化的・宗教的純潔を守るためだけに混淆性に抗うことを悪であると述べている。多文化主義社会であるアメリカにおいて、有色人移民作家として生きるムカジーにと

って、混淆こそ、自然な在り方であっただろうと思われる。Nalini Lyerは *The Holder of the World* が移民の経験とアメリカの歴史の有する多文化の側面を読者に認識させることによってアメリカ文学の白人中心主義を批判しているが、これは妥当な意見だと思われる。

そもそもムカジーはなぜ『緋文字』を基にして創作を試みたのか。その点、『緋文字』の登場人物のひとりであるパールの人種的混淆性は非常に示唆的である。パールの人種的混淆性については、Jay Grossが19世紀中葉アメリカの人種的文脈を踏まえた上で、ディムズデイル牧師を黒人のイメージが付与された人物だと捉え、彼とヘスターとの間にできたパールが混血児であるという示唆的な見解を提出している。ムカジーはパール的人物造型のなかに暗示的に表されている人種的混淆性を看取り、「ブラック・パール」という混血児を創造したのである。ある意味で、『緋文字』の有する人種的混淆性がムカジーというインド系アメリカ人に *The Holder of the World* を書く動機を与えたと言える。ただ注目したいことはホーソーンが、ちょうどパールが人種的混淆、あるいは文化的混淆を否定的に描いている一方で、ムカジーが人種的混淆、あるいは文化的混淆を多文化主義アメリカの理想的在り方として肯定的に描いていると言えるかもしれない。それはともあれ、ハイブリッドな要素を有する『緋文字』は多文化主義社会・多民族社会であるアメリカにおいて、その重要性を持ち続け、ムカジーのような移民作家、非白人作家を刺激してやまないだろうと思われる。

(3) ホーソーン第3の長篇『ブライズデイル・ロマンス』はこれまで奴隷制撤廃運動と関係づけて論じられてこなかったが、しかしながら、ホリングズワースやゼノビアなどの改革運動家たちの人物造型に着目すると、彼らが密かに当時の奴隷制廃止運動に関係づけられていることが理解できる。ホリングズワースは博愛主義者とされるが、当時アメリカ社会では、奴隷制廃止主義は博愛主義者と呼ばれていた。一方ゼノビアは過激なフェミニストとされるが、当時のフェミニストは女性の立場と黒人奴隷のその類似性を強調し、奴隷制廃止の立場をとっていた。ホリングズワースやゼノビアがいかに白人の中産階級社会にとって危険な存在であり、そして彼らがどのように、黒人や東洋人などの有色人種表象によってその人物造型がなされているかを明らかにした。『ブライズデイル・ロマンス』においてホーソーンは

ゼノビアやホリングズワースを破滅させることによって、また語り手カヴァデイルに物語結末においてプリシラという家庭性のイデオロギー（保守的白人中産階級の価値観）を体現する女性に愛を告白させることによって、白人中産階級社会にとっての脅威（奴隷制廃止運動に加えて労働者階級の台頭やジェンダー規範のゆらぎを含む）を封じ込め、秩序の回復を現出させたのである。『ブライズデイル・ロマンス』においてホーソーンは同時代の改革運動（奴隷制廃止運動を含む）に対してこの作家らしい保守的な見解を提示するなかで彼がめざすところの「人間のこころの真実」を描き出していることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

### (1) 藤吉 清次郎

「*The Blithedale Romance* 論---奴隷制廃止運動を巡って---

『高知大学学術研究報告』(査読：無)  
第60巻、2011年、219-229.

### (2) 藤吉 清次郎

「ムカジーとホーソーン  
--- “hybridity” の問題をめぐって---

『高知大学学術研究報告』(査読：無)  
第59巻、2010年、121-129.

### (3) 藤吉 清次郎

「*The Scarlet Letter* と *Beloved* --- 「スレイヴ・ナラティブ」の観点から---

『高知大学学術研究報告』(査読：無)  
第58巻、2009年、11-20.

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤吉 清次郎 (Seijiro Fujiyoshi)  
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授  
研究者番号：80238625

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし